

結婚指輪

してますか？

3回にわたって、高齢の方からのお便りを紹介してきました。変わりゆく時代を懸命に生きてきたその姿は、人の心を動かす、人生を見つめ直すきっかけを与えてくれるような気がします。

今を生きて

兵庫県芦屋市のNPO法人「にっち倶楽部」の久野幸子さん(64)も、そう感じている一人です。送っていた情報誌で「百歳の肖像」という企画を手がけておられると知って、編集室を訪ね、お話をうかがったのです。
「百歳になって、今を生きていくとする方々に、元気をもらっているんです」
朗らかに話す久野さんは、阪神大震災の被災者を力づけようと、1999年から、情報誌(年4回)を発行し、「百歳の肖像」の連載を続けています。主に関西に住む百歳を訪ねてインタビューする企画で、登場した方は60組になり

変わりゆく時代 懸命に

100歳それぞれの人生

ます。これまでの記事を見せたいなと思ってた。もの忘れが進みつつも娘の支えを受け、青春時代に体験した英国流の暮らしを晩年も楽しんだ男性がいました。結婚5年で夫を亡くし、人とかかわる中で、書道に生きがいを見いだした女性もいます。

記者から

「にっち倶楽部の「にっち」は、英語でniche。」ふさわしい場所」を意味するそうです。自らの老いや親の介護に直面しながら「にっち」を探し求めるメンバーの皆さんの思いが、心を

引きつける情報誌につながっているでしょう。

高齢世代の話はひとまず終え、次回は、壊れかけた夫婦の関係が、夫の一言で救われたという妻の話を紹介します。同様の体験をお持ちの方は、お便りを寄せてください。(島香奈恵)

きます。久野さんは、高齢の方を囲む家庭に出会う中で、「それぞれが、相手の思

久野さんは今は亡き妻の介護を極えていたので、夫が健母と同居し、喪食の世話を

が所在不明になっているニュースを耳にした時、こう考えたそうです。「迷惑をかけたくないと思ううちに、親子の距離が広がってしまった人もいるかも

最新号では、79年も共に歩み、百歳を超えたご夫婦が紹介されています。発行前に夫は亡くなりましたが、温かな家庭を築いてくれたことが伝わってきました。
「六十歳からが人生ですが、な」人死ぬまで良縁あって、胸張って生きたい。母、インタビューで心に響いた一言が見出しになっていて、それぞれの人生の道程が映し出されているようです。長く生きるほど、夫や親子のかかわり方も変わって

いを尊重し、語り合うことが大切ではないか」と実感されました。それは、ご自身の体験も踏まえてのことです。

しました。8年が過ぎた今年6月、「もう十分よ」と、親母は自分で老人ホームへの入所を決めました。これ以上負担をかけまいと思ったのでしよう。その決断を尊重し、「寂しくなったら帰ってきていいよ」と送り出しました。

「百歳」久野さんは多くの「百歳」も少なく「敬老の日」(20日)です。身近な高齢の方と言葉を交わしつつ、これからの生き方や家庭のあり方を考えてみませんか。

自らホームへ
来年1月に百歳を迎える親母は、40代で夫を脳卒中で失い、教師をしながら、息子と娘を育てたそうです。2人の自立後、一人で暮らしていましたが、震災で自宅が倒壊し、移転先で骨折して、車いすの生活になりました。

くらしの家庭